

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の大会ビジョンには、すべての人が自己ベストを目指し、「一人ひとりが互いを認め合い」、「そして、未来につなげよう」という3つの基本コンセプトがある。われわれ理学療法士も来たる大会に「おもてなし」をすることで共生の契機として、レガシーとして未来へ継承するという、日本人としてのかかわりによってアイデンティティを育み飛躍の機会とできるかどうか願ってもない機会である。スポーツとのかかわりをあらためて強く考えて、自らの成長への機会としてほしい。

### ■スポーツドクターから見た理学療法士の役割と期待(奥脇 透論文)

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向け、医療チームとして行うべきことは、まずは大会に向けての準備、そして実際の大会サポート、さらには大会後のサポートである。そのためには理学療法士が、医療機関におけるメディカル・リハビリテーションだけでなく、スポーツ現場でのアスレチック・リハビリテーションやコンディショニング、さらには大会関係者として、多岐にわたって活躍することを期待する。

### ■選手から見た理学療法士の役割と期待(室伏広治, 他論文)

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向け、オールジャパンでアスリートを支援する体制づくりが模索されている。本稿では、オリンピック男子ハンマー投のメダリストであり、現在スポーツ科学者として医歯学との連携を図りながら、動作解析研究やトレーニング開発などアスリート支援に取り組む室伏広治氏に、これから理学療法士に期待される役割について伺った。

### ■スポーツ理学療法の国際的動向—オリンピックサポートに向けて(片寄正樹論文)

2020年東京オリンピックのホスト国として期待される大会組織委員会が運営する理学療法サービスについて焦点をあて、サービス展開のために必要なプロセスを模索するとともに、レガシーまでも考慮することの重要性を解説した。ロンドンオリンピックにおける理学療法サービス状況、スポーツ理学療法士認定の国際動向などを参考に、グローバルスタンダードのスポーツ理学療法の歩みと歩調をあわせる積極的な展開が期待される。

### ■トップレベルアスリートへのリハビリテーション・コンディショニング—現状と課題(松田直樹論文)

国際競技大会などにおけるアスリートの活躍は、見ている人たちに誇りと喜び、夢と感動を与え、社会全体の活力となる。身体を酷使する競技力の高いアスリートは当然身体に加わるストレスが大きい。そのようなトップレベルアスリートの支援のなかに医学的なサポートは不可欠である。現状での競技力向上のためのリハビリテーション・コンディショニングサポートについて述べる。

### ■障がい者アスリートのメディカルサポート環境—現状と課題(門田正久論文)

スポーツ基本法制定から始まり、多くのシステムが障がい者アスリートの周辺環境を激変させてきているなか、理学療法士として本来あるべき障害者支援の専門家として、2020年東京大会のみに着眼せず長期的な継続可能なアスリート支援を地域から推進していくことが重要である。また理学療法士こそがその中核になり得る専門職である。

### ■障害者スポーツへのサポート—地方からの発信(土中伸樹論文)

日本で最も人口の少ない県である鳥取県から東京オリンピック・パラリンピック競技大会に出場することなど本当に可能なのか。メディカルフィットネスセンター CHAX(チャックス)は、理学療法士が当初より企画・運営を任せられつくり上げた、social inclusionを地域に実現することを目標とした施設である。理学療法士は、社会に貢献することこそが最も重要な存在意義であり、一億総活躍社会をつくり上げる原動力となり得る。